

健ちゃんのテレカコレクション

<第8回 映画編>

映画のテレカは、コレクションの中では出版、漫画について所有枚数が多くいつかはこのコラムの中で取り上げたいと思っていた。只、枚数は多いもののテーマを絞った場合、適当な枚数、これはといったテレカが無かったので先送りしていた。今回は映画の企画があるという事で、対象作品を中心に載せてみました。

「映画雑感」

・タイトル・クレジット

最近の映画はいきなりファーストシーンから始まる傾向にあるが僕はプロローグもあって欲しい。ストーリーに関係ないものは邪魔だと言いきった批評家もいたが、本編への期待を抱かせる儀式のようなものがあっていいと思うのだ。それ

とエンディングだ。本編が終わったあと延々と俳優、スタッフの名前だけを見させられるのはかなわない。その点ジャッキー・チェンの出演するエンディングは毎回NGシーンなどを映しながらテロップを流している。最近見たものでは「ワイルドシングス」などはミステリーものゆえ本編では見せられないアライブづくりやトリックの部分のテロップを流すことで工夫を凝らしているところが評価できる。

・映画館の思い出

一番最初に見た映画が何だったのかは覚えていないが、小学校にあがる前から中学生になる前までは毎週のごとく映画館に通っていた。近所にあった末吉映画館は3本立映画館で日本映画を主流に週変わりて上映していた。3本とも子供向けというわけではないから大人向けの作品まで幅広く見ていた。もっとも成人指定の作品は当然入れないし3本の中に混ざっているとその時は外に出されたものだ。（「砂の女」の回の時、子供は全員出された記憶がある）見た作品は少年探偵団、月光仮面、黄金孔雀城、東宝のSFもの海底軍艦、ゴジラ、ラドン、森繁久弥の駅前シリーズ、東映時代劇、日活のアクションもの、任侠もの等、列举したらきりが無い。気に入った作品をもう一度見たいと思ったら最低4本は見ることになるから出てきた時は外の明るさで頭がクラクラしたものだ。他にいった3本立て映画館といえば京浜映画館と鶴見





文化。両館とも歩いて行くには遠すぎたのと鶴見文化が洋画館だったのでめったに行くことはなかったが怪談、モンスターもの（ドラキュラ、狼男等）がかかると兄弟（実際は姉と僕と妹）揃って怖いものが好きだったのでバス代を惜しんで歩いていったものだ。鶴見文化で見た「沖縄怪談逆吊り幽霊」「支那怪談死棺破り」などは本当に怖かった。結局、なんだかんで年間150本は見えていたことになるが家が貧しかったからそんなに通えるわけがなかった。封切館は佃野商店街に2館？あったが高くてとてもじゃないが入れなかった。（その映画館があった通りはその名残で今もレアルト通りと呼ばれている）当時、3本立映画館の料金は小人30円、中人40円、大人60円だった。ラーメン1杯が40円、僕の小遣いが1日10円だったから毎週行くには相当キツかった。当時は大人と一緒にだと小学生以下は只だったが両親は公設の市場で惣菜や貝の商いをしていたから土日も仕事でそんな余裕は無かった。そこで何とかタダ見ができないかと考えるわけだが。小柄な姉たちは知らない人の子供のふりをして一緒に入ったり駆け込みというズル入りをしていた。駆け込みというのはよく行った末吉映画館は正規の入口の他に映写室への出入り用にもう1つ入口があり、外側から2m程入った奥は扉ではなく黒いカーテンで仕切られていただけだった。従って、サッと入れば正面を向いている映写技師には気が付かれなかった。僕などは気がちっちゃいものだからたった2mの距離がとてつもなく遠く感じられ姉たちがカーテンの間から手招きしているのになかなか入れなかった。小学校も高学年になる頃には店にくるお客がその映画館の招待券をくれるようになったからそういう冒険はしないで済むようになった。ところがうまくいかないもので招待券の配りすぎが原因かTVに食われたのが原因か中学にあがる頃に映画館がつぶれてしまいマーケットになってしまった。その頃には我が家にもTVがあり（東京オリンピックが見たくて一番上の姉が泣いてやっとならしてもらったそうだが全然覚えていない）中学、高校時代はオリンピックの影響でクラブ活動、家にいるときはTVに明け暮れていたので映画からめっきり遠去かってしまっ



た。再び映画浸りになるのは高2の中間試験の時に起きた学校闘争の影響だ。学校の授業体系が変わり選択科目が多くなったため。僕は進学校に拘らず早々と就職することにしたので高3の時は午前中授業を受ければ単位も足りていた。学校へは遊びに行っていたようなもので暇はいくらでもあったから見たい映画を3本上映している映画館や鶴見文化へは入り浸りになりすっかり洋画好きになってしまった。

・字幕

封切館では真中最前列でふんぞり返ってみることにしている。封切館の字幕はスクリーンの下にでるからだ。一番前でないとたまに前に座ったやつで妙に姿勢のいいのがいるからね。3本立映画館となると右端に字幕がくるから右側の前の方に座って右目の端で字幕を追いながらスクリーン全体を見ていた。英語がわかれば字幕なんていらぬのにと本気で思ったものだ。

・途中から

映画は何があろうと始めから見なきゃダメだと強いこだわりを書いていたのはウッディ・アレンだったか？でも僕は全然気にならない。昔の漫画雑誌は1つの作品が本誌と別冊に分かれていて姉が本誌のほうを見終わらないと見せてくれないので別冊から読むのが習慣になっていたからだと思う。

